

まずは、自分の体の「コンディション」を知ることから

肝属郡医師会立病院 副院長
にしだたくじ
西田卓爾 医師

「救急の日」にあわせて、救急車を呼ばなくてはならないような病気やケガを未然に防ぐために、日ごろから気を付けるポイントについて、肝属郡医師会立病院副院長の西田卓爾先生にお話を聞きました。

「今年の夏は、例年に比べ40歳から60歳代の方が熱中症で救急外来を受診される方が多く見られました。」

とくに多かったのが、炎天下での外作業から自宅に戻り、夕方から夜にかけて体調が悪くなって受診されるケースです。

若いから大丈夫と思わず、いつもと様子が違うなどと思ったら、早めに病院を受診することが重要です。」と話します。

「かかりつけ医」や相談できる人を持つこと

「先日、救急搬送されたケースで、近所の人の発見通報で搬送された1人暮らしの高齢者がいました。」

この方は1人暮らしで、かかりつけ医もいなかったため、普段の状況を把握しにくく、本人も誰に相談していいか分からずに困っていたそうです。かかりつけ医は、

普段の健康管理でもアドバイスしてくれる存在でもあり、家族で同じかかりつけ医であれば家族の健康管理や病歴も知っている頼もしい存在になります。

かかりつけ医も含め、普段から相談できる人を持つことが大切です。」

普段から自分の体の「コンディション」を知る

「痛みなど自覚症状がある場合は病院を受診しますが、生活習慣病など自覚症状がほとんどない病気は、発見が遅れてしまう場合があります。また、健診後の再検査を受診しない人も多く、発見が遅れたことで手遅れになるケースもあります。」

定期健診や人間ドックなど、普段の健康管理で「自分の体のコンディションを知る」ことが大切です。健診等で再検査が必要と判定された方は、放置せずに早めに病院受診しましょう。

また、普段から通院している方も、病気によっては必要な項目しか検査されていない場合がありますので、検査項目の多い健診等を受診することをお勧めします。」

錦江町民生委員
渡辺 政雄さん
(西大原自治会)

救急医療情報キットを活用しましょう

急激に進む少子高齢化によって、地域における見守り、支え合いが重要になっています。

こうしたことから、みんなで見守り、支え合う安心のまちづくりを目指して「地域見守りネットワーク事業」を行っています。

これは、持病やかかりつけの病院、服用薬、緊急時の連絡先などの情報を記入した「緊急連絡カード」を玄関など目につきやすい場所に設置し、急病などで助けが必要になったとき、救急隊員などにその情報をいち早く確実に知らせ、命を守るためのものです。

また、平成29年度からは、外出先での事故や急病などに備えて、